

IV 花き

実 況

1 キ ク

奥越地区の秋植え夏ギクは、3月23日現在で平地の畝に積雪がみられないため、3月下旬より不織布被覆が行われている。和泉地区等の山間部では150cm程度の積雪がある(3月下旬)。春植えギクでは親株育苗ハウスで採穂が3月30日前後に**行われる予定**。

あわら市では無加温ハウスで採穂、挿し芽が行われている。一部に凍害で挿穂基部が壊死している株がみられた。昨年はハウス内でのトンネル被覆による促成栽培が行われていたが、今年はハウスが破損しているものが多く、5月咲は減少する見込み。

福井市東郷地区では、切下株を11月上中旬にハウスに伏せ込んだが、親株ハウスにアブラムシ中発生。大土呂の親株ハウスは白さび病多発。

越前町では、昨年と同様に、台刈りで5cm程度に調整した親株をハウスに伏せ込み後、12月中下旬に古茎を調整した。「小鈴」、「翁丸」、「めぐみ」は3月上中旬に挿し芽を行った。病虫害は白さび病多発、アブラムシ中発生(3月16日調査)。

越前市では親株ハウスに搬入した親株からでた穂を3月中旬から挿芽開始した。アブラムシ類少発生である。

二州、若狭地区では3月下旬から挿し芽を開始し、4月15日頃の定植を予定している。台風の影響でハウスが倒壊し、親株のハウス取り込みができなかったところでは、掻き苗の定植を予定している。

2 ユ リ

坂井市春江町では、3月下旬にかけて、LAユリの球根が定植された。

1月に播種された大野市のシンテッポウユリは、3月19日現在、子葉1枚がでている状態である。

3 トルコギキョウ

越前市では、9月中旬播種、11月13～20日定植の「ボヤージュグリーン」「一番星」が3月16日調査で草丈3cm、展開葉7対程度で、ハウス内のビニルトンネル被覆は終了した。二度切作型では、草丈2cm、分枝数は3本程度である。

二州、若狭地区では8月採りの作型が3月上旬から播種されている。

4 ストック

坂井北部丘陵地は一戸のみ植栽されていたが、雪害でハウスが被害を受けた。

南越地区では8月22日～9月20日にかけて直播されたスプレー咲「カルテット」シリーズが3月16日調査で、8月29～9月5日播種もので8割～ほぼ収穫済み、9月12～20日播種で開花始め～収穫盛期。

5 その他

福井市南部地区のヒマワリ「サンリッチパイン45」、「サンリッチオレンジ」は3月11日調査で3月下旬に播種される予定。圃場の準備が進んでいる。

対 策

1 キクのハモグリバエ類とカブラヤガの防除

(1) ナモグリバエは4～5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤(ハモグリバエ類に登録有)、スタークル顆粒水和剤(ハモグリバエ類に登録有)等を

用いて、前もって防除しておく。

(2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に本年は3月が温暖な日が多く、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤(ナモグリバエ、ハモグリバエ類登録有)、アクタラ顆粒水溶剤(ハモグリバエ類)、ジェイエース水溶剤(マメハモグリバエ)を組み合わせて用いる。



写真 ナモグリバエ幼虫の食害孔道(右)と孔道が腐生菌に感染したもの(左)

(3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病や他病害の原因となるため(写真)、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する。

(4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理が有効である。

2 キクの挿し芽作業

- (1) 採穂の1~2日前に親株の病虫害防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤、有機リン剤等の散布により、アザミウマ類や白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよいが、極端に露が多い時間帯は避ける。
- (3) 摘心した親株から採穂する。極端に生長したものからは採穂しない。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3~4枚をつけ、長さ5~7cmに調整する。
- (4) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろろう。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7~10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、バーミキュライト5+ピートモス5などを用いる。
- (6) 土詰め後の用土は十分に吸水させておき、はし等で深さ2cmくらいの挿し穴をあけておく。
- (7) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とする。間が空きすぎると活着が遅れる。挿し芽後十分にかん水し、挿し穴が塞がれるようにしておく。遮光下の暖かい棚上に置き、10日目以降少しずつ遮光をはがしてゆく。温床上で14日、無温床で20日で苗ができる。

3 トルコギキョウの管理

(1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対(草丈が15~20cm)頃までは水分や肥料を十分に与える。二度切り栽培は、草丈が10~20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくい。

上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種はカルシウム入り液肥の葉面散布

を行うとよい。

- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）が1.0mS/cm以上と高い場合に発生する障害の可能性があるので、圃場準備の際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落とし、塩類を除去する。
- (4) 土壌酸度が低い時も同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1㎡あたり深さ10cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120g、砂質土で80gとされる。そこで対策としては薄い石灰水（消石灰などの石灰資材を100g/水10ℓに溶かす）10ℓを3㎡に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (5) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、抜取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分に行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は、扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、降雨によるハウスサイドからの雨滴で灰色かび病や立枯れの発生が助長されるので注意する。

4 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90cmの50m畝では約2500～3000本の苗が植わるので、種子量は5dl（約4000粒）必要である。催芽処理として、播種前に種子をガーゼで包み、水に浸漬して48時間冷蔵庫に入れる。水が腐らないようにするため、24時間後に水を替える。
- (2) 200穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上（発芽適温26℃）を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃（播種10日後）に遅れないよう定植する。
- (6) 早生品種は4月下旬播種で6月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」、「マンガー」「オレンジ」の順に開花する

5 スイセンの春以降の管理

- (1) 養成中のスイセンは球根を肥大させるため、3月に施用してない場合は4月上旬までにそさい5号を10aあたり40kg施用する（窒素成分量6kg/10a）。
- (2) 灰色かび病等発生が見られる株があるときはゲッター水和剤1000倍液で防除する。
- (3) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (4) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。